肥前鳥居の分類と定義

会員　小澤　祐二

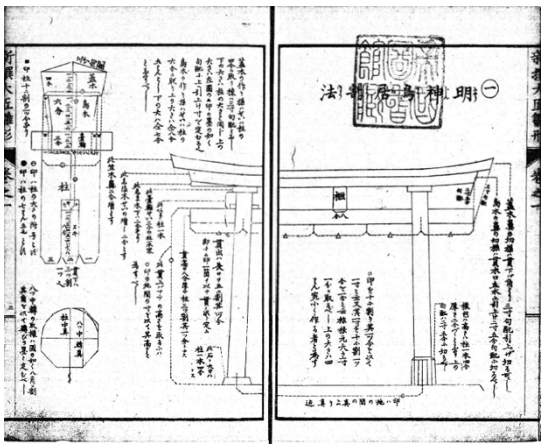
一、前書

鳥居に関する研究は、研究事例が少なく、昭和初期数点有るのみでそれ以降は大きな研究成果はない。「肥前鳥居」は鳥居の一分類であり、同様である。従って、肥前鳥居の分類はその昭和初期のものが現代でも使用され、時代が経過程で研究成果には無い条件が加って、様々な肥前鳥居の「定義」が蔓延っている。よく言われている事として、笠木島木の一体化と亀腹と柱の一体化、柱が3分割されている事がある。自分の個人研究としてこの定義付けがどうしても必要であり、今回は笠木島木に絞って論考として提起したい。

二、肥前鳥居の研究史

近世の人々の識字率が非常に高く幕末に来日した外国人が驚愕したとの事が長く言われていた。ところが先日、雑誌現代ビジネスに識字率に関する記事が掲載された。明治初頭にある県が国民の識字率を調査した記録が残っているが、自分の名前を読み書き出来た者は6・7割程度、新聞を読めた人は2%以下しかいなかったとの事であった。近世では漢字、平仮名、片仮名が現在と同様に使用されていた。ただ、片仮名以外は草書体であり、一つの文字でも書き方が多数ある。平仮名に至っては「変体仮名」と言われ、現在の住民基本台帳収録変体仮名には168種が登録されている。この変体仮名は、明治以降平仮名として47種類を基本に統一された。これは近世の文書で使用されていた日本語が難読であった為に文字教育の妨げになると考えた為である。時代劇では高札の前に住民が集まり、誰かが「何て書いてあるんだ？」と言っているのを聞いて、脇役俳優が高札の内容を読み上げているシーンがよく見られた。その様な環境の中で、近世後期都市部では文化芸能が盛んになった。文化の面では書物も隆盛を極め、旅行観光関係の書物や神社仏閣等ありとあらゆる書物が刊行された。

建築関係の書物には神社仏閣の建物、灯籠や鳥居の種類の書かれた本があり、近世では大工が使用していたと考えられるという。識字率の観点から大工棟梁等のある程度文字が読める人が参考にしていたものと考える。大工は近世では徒弟制度にあり、大工棟梁の人数や日当が藩により決められており、職業の人口管理がなされていた様である。諫早日記にも大工の日当が記載されている。



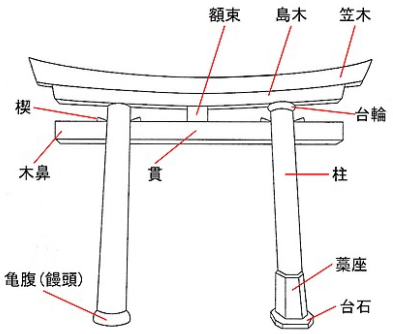
国立国会図書館蔵「新撰大匠雛形大全　壹」より

明治30年(1897)刊行の「新撰大匠雛形大全　壹」には鳥居が一種類(明神鳥居)掲載されている。鳥居図と共に各部位の比率が書かれている。鳥居の基本は柱の上部直径であり、その直径に対して各部分がどういう比率であるのかが重要で、これを木割(きわり)(図)という。この木割は古来よりの図であり、鳥居に関しての中世の木割も残っている。しかしながらこの書物には一種類の鳥居しか掲載されておらず、その他の近世の建築関係書物でも数種類程度の記載しかない。もちろん、「肥前鳥居」の分類はなく、今まで肥前鳥居に関する木割図を含めて建築に関する各種図面は全国でも肥前でも残存していない。これは鳥居を建ててきた佐賀藩石工達の研究が全く進んでいない事も理由としてあるが、肥前鳥居が佐賀藩を中心にして一時期でしか建てられておらず、明神鳥居に駆逐されたという経緯によるものと関係していると考えられる。

「肥前鳥居」としての分類は、管見の限りでは昭和十八年二月根岸榮隆(ねぎしえいりゅう)著「鳥居の研究」が最初である。その中で、当時の専門家では12種類の鳥居の種類があり、当時の外国人研究者は22種類、当根岸榮隆によれば64種類に及ぶという。同時期に津村勇が刊行した「鳥居考」では28種を揚げる。後者の鳥居考では肥前鳥居は登場せず、「筥崎鳥居」となっている。この状況を考えるに、鳥居に関する研究はこの頃始まったばかりで、研究者によって分類も名前等も定説は存在していなかった。この影響もあって、現代でも肥前鳥居、筥崎鳥居、鎮信鳥居等同じ形態の鳥居でも名前が様々であり、この中途半端な状態を改善する必要があると考える。因みに、「肥前」は現存している肥前鳥居の中心である佐賀、長崎の地名であり、「筥崎」は筑前筥崎宮、「鎮信」は平戸と狭域の意味であるため、ここでは「肥前鳥居」の名前で統一して記載する。

三、鳥居の解説

鳥居の分類をする上で、鳥居の各部位の名称を明神鳥居をもって以下に説明する。鳥居は亀腹・台石の上に柱を立て、貫で柱間を固定し、島木と笠木を柱の上に乗せる形である。亀腹、台石は通常穴が空いており、木製鳥居の場合は臍(ほぞ)組の様にそこに柱を突き立てる様になっているのが通常である。ただ、時に臍組でない場合も見受けられる。石製の場合では亀腹、台石の上に柱が載っているか、亀腹、台石が凸になった形の臍組の場合がある。貫は木製の場合は通し柱となっている。これは掛造(かけづくり)と言われる寺院建築物の土台柱と柱を接続して固定するものと同様である。石製鳥居の場合は柱を貫通している場合と、見かけ上、一本に見える場合とがある。前者は肥前鳥居に

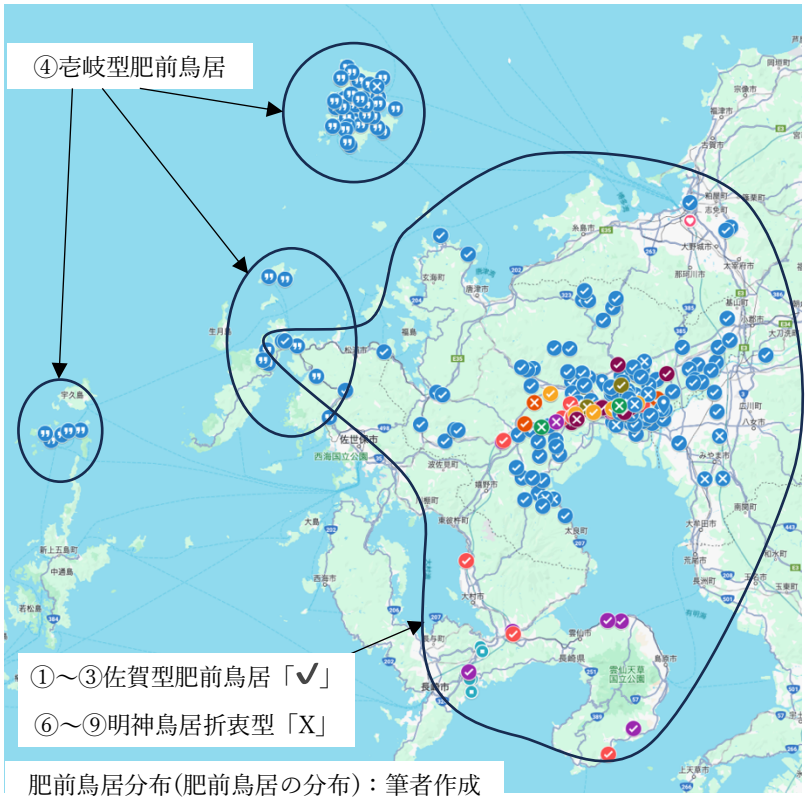


おいて顕著であり、後者は明神鳥居の場合に多い。貫を固定するのは楔（くさび）であるが、明神鳥居において木製で顕著であり、石製の場合は近世末や明治以降で多くなっている。楔は柱と貫をしっかりと固定するための重要な部品である。島木と笠木は柱の上にこれも臍組にて接続されているのが通常であるが、石製の場合柱の先端に載っているだけの場合も多い。

四、肥前鳥居の分類

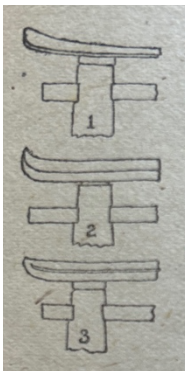
肥前鳥居は、先の根岸榮隆「鳥居の研究」の分類によれば、次の3種類に分けられる。これらは、笠木島木の形状によって分類されている。(1)佐賀市を中心にした佐賀型肥前鳥居、(2)壱岐を中心にした壱岐型肥前鳥居、(3)佐賀型肥前鳥居が明神鳥居に駆逐される過程での明神鳥居折衷型である。(1)の佐賀型肥前鳥居は、旧佐嘉藩での範囲と筑前・筑後、島原藩、大村藩、平戸藩、唐津藩に及んでいる。(2)の壱岐型肥前鳥居は、壱岐を中心に上五島の一部と平戸に波及している。特に壱岐にある神社(神社庁登録数約150)の殆どの鳥居がこの形となっている。(3)は、佐賀型肥前鳥居が1660年代以降に建立数が減少していく中で、全国で建立されていた明神鳥居が肥前でも次第に建立数を増やしてく中での肥前鳥居と明神鳥居の折衷型であり、様々な形が存在する。この頃漸く領主等の統治者から民衆によって石造物が建立されていく過程の転換点であり、明神鳥居が規格化されていて建立数が爆発的に増加していく事になる。

前図は様々な資料等により筆者が調べた肥前鳥居の分布である。チェックマークが(1)佐賀型肥前鳥居の分布、「X」マークが(3)明神鳥居折衷型の分布、「“」マークが(2)壱岐型肥前鳥居の分布であるが、まだ全て確認出来ていないので一部間違いがあるかもしれないことを先にお詫びしておく。



肥前鳥居分布(肥前鳥居の分布)：筆者作成

(1)佐賀型肥前鳥居

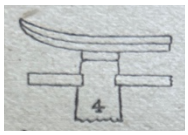


右図の1～3が「鳥居の研究」記載の佐賀型肥前鳥居の笠木島木の形である。絵を見ると笠木島木の端の鼻切(はなきり)の形は一体になっており、明神鳥居の形状と一線を隠している。実際の佐賀型肥前鳥居の例が、右の佐賀市四面神社二之鳥居である。この鳥居は寛永十一年(1634)で、鍋島勝茂建立となっている。この鳥居に関しては、後程詳細を述べる。

佐賀市四面神社二之鳥居：

佐賀型肥前鳥居

(2)壱岐型肥前鳥居

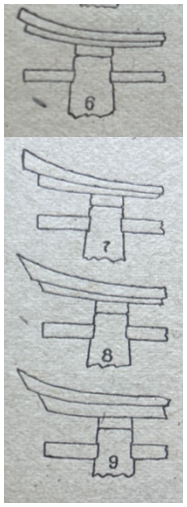


上図の4が壱岐型肥前鳥居の笠木島木の形である。笠木と島木の鼻切の形が佐賀型肥前鳥居と同じで、差異はない。これが壱岐型肥前鳥居も「肥前鳥居」と分類されている所以である。例として平戸の総社神社の写真を掲載する。この鳥居の柱を確認すると建立時期はよく読めなかったが、「乙年」の文字が読めた事と、柱と柱間比率、台輪形状から推測するに、慶長十年(1605)であると考える。

平戸市総社神社二之鳥居：

壱岐型肥前鳥居

(3)明神鳥居折衷型



上図が肥前鳥居から明神鳥居へ建立が変化する時期の鳥居の笠木島木の形である。笠木島木の形状は明神鳥居のそのものであるが、実際の鳥居を観察すると、笠木島木の比率、貫の厚み・比率、柱の太さ、柱間幅高さ等肥前鳥居の様々な名残を残している場合が多い。1600年中期から明神鳥居が肥前地域の中で建立されていくが、それと同時に肥前鳥居の建立が減少していく。各石工集団の一子相伝として伝えられて来た木割図は、自己石工集団外には供給は出来ず、又柱に貫を挿入する為に貫通させる様な穴開け加工が肥前鳥居では必要で、柱を割らない様に加工する石工職人の熟練度が必要であった。熟練度が必要であったため、鳥居建立数を増加させることが出来ず、建立要求数に対する需要と供給力のバランス

が崩れて来たと考える。佐藤亜聖編「中世石工の考古学」によれば、江戸初期に行った徳川幕府による全国の城の建築修復のために石垣普請を各大名に割り当てているが、その普請需要に対応するために石工集団専門職による石切ではなく、石切方法のマニュアル化を図って誰でも石切をすることで石垣の石切増産を図ったとある。明神鳥居は肥前鳥居の様に柱を貫通させる加工が無く、熟練度が少なくて済む。また、柱を細く出来る為、原石の大きさも小さく出来、これも原石取得率が上昇する事になる。一般化して来た明神鳥居の木割を導入する事で職人の力量不足を補うことを考えたのではないかと考える。只前述した様に木割に示される各種比率が肥前鳥居に似たものもあることから、石工集団による明神鳥居の試験導入というのも可能性として考えられる。この過程については、今後の研究に希望を持ちたい。

明神鳥居笠木島木

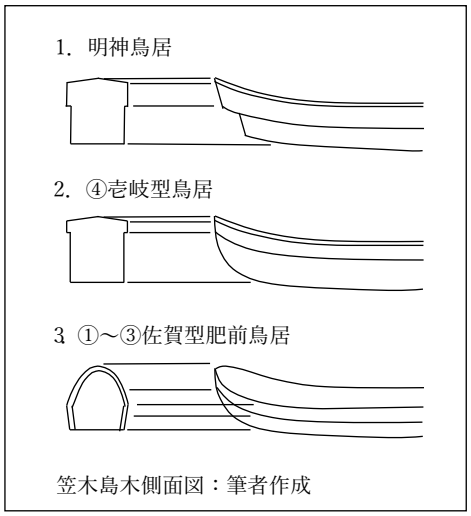
壱岐型肥前鳥居笠木島木

佐賀型肥前鳥居笠木島木

平戸市恵比寿神社鳥居笠木島木

五、佐賀型肥前鳥居と壱岐型肥前鳥居における考察

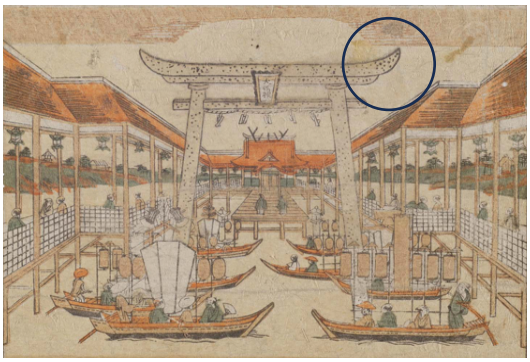
肥前鳥居は、笠木島木の正面からの形において、鼻切が一体になっている状態であるとの記述をした。佐賀型と壱岐型との大きな違いは、側面から見た笠木島木の形状である。上に明神鳥居、壱岐型肥前鳥居、佐賀型肥前鳥居の正面と側面の形状を図示している。1は明神鳥居、2は壱岐型肥前鳥居、3は佐賀型肥前鳥居である。これからもわかる様に、正面図では、壱岐型、佐賀型肥前鳥居は共によく似ている。しかし、側面より確認すると明神鳥居と壱岐型肥前鳥居の形状はそっくりである。方や、佐賀型肥前鳥居は全く形状が異なっている。



笠木島木側面図：筆者作成

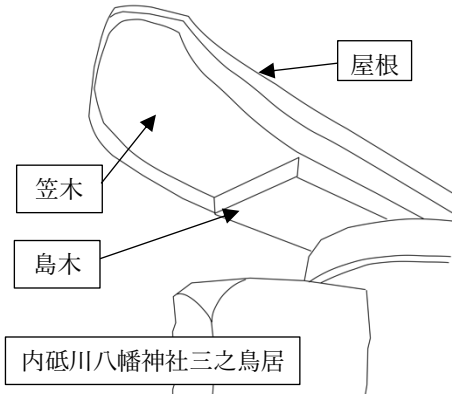
様々な鳥居の観察をすると、明神鳥居で笠木島木の鼻切の下部角が丸みを帯びている場合も数多見受けられる。例として平戸市内のオランダ商館斜め前の海岸沿いにある恵比寿神社の鳥居は、建立

年代は不明であるが笠木の下部角が丸みを帯びている（写真△部）。近世中期の歌川豊春刊行の「厳島弁財天図」にある、6代目の明神鳥居の図があり、笠木島木の鼻切が丸みを帯びている。実際にはどの様になっていたかは不明であるが、絵図の通りであった可能性も否めない。これらにより、壱岐型肥前鳥居は、鳥居建立の石工が望んで明神鳥居の笠木島木の鼻切下部角が丸みを帯びる様に加工したものであり、結果正面から見て笠木島木が一体化した様に加工したと推察する。また、当鳥居は壱岐に数多く存在しており、平戸に数基、上五島に数基程度であることから、元は壱岐で発展したものが他域に伝播して来たものと考える。因みに壱岐にある神社は、「延喜式」神名帳（延長五年（927）成立）には二十四社の記載（全国比0.84%）があり、壱岐の神社は高い式内社率を誇っている。従って、個人の見解としては、壱岐型肥前鳥居は肥前鳥居の分類ではなく、壱岐型明神鳥居とすべきである。



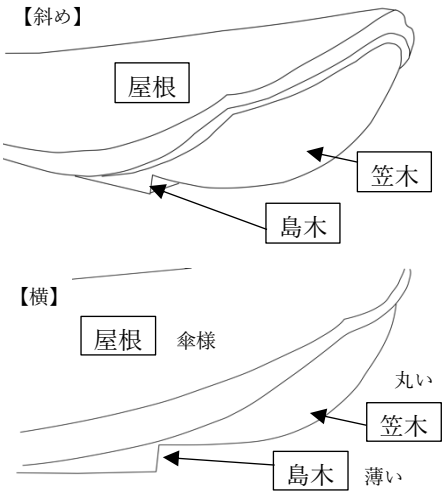
歌川豊春「厳島弁天図」18世紀

佐賀型肥前鳥居については、先に笠木島木の図と写真を示したが、明神鳥居とは全く異なる肥前地域独特のものである。下図は小城市牛津町上砥川にある内砥川八幡神社の三之鳥居の笠木島木で、建立年は銘が無いため詳細は不明であるが、二之鳥居が正保四年（1647）であり、鳥居の形状からそれ以前の天正期（1570年台）と推定されている。砥川は佐嘉藩支藩の小城藩の内にあり、藩御用の石工集団が本拠地を構えていた所である。これは、その石工集団による作製と思われる鳥居であるが、この神社境内に形状が非常に似た笠木島木が放置されている。これらを見ると笠木の下に島木が見て取れ、佐賀型肥前鳥居の特徴とされていた笠木島木の鼻切での一体化はない。只島木が非常に薄く、笠木の鼻切は丸く膨らんでいる。その上に傘の様に屋根の様な物が被せられている形である。この形を見て想像するのは厳島神社の大鳥居である。この鳥居は両部鳥居（りょうぶとりい）（四脚鳥居（しきゃくとりい））の代表的なもので、明神鳥



内砥川八幡神社三之鳥居

内砥川八幡神社境内放置鳥居笠木

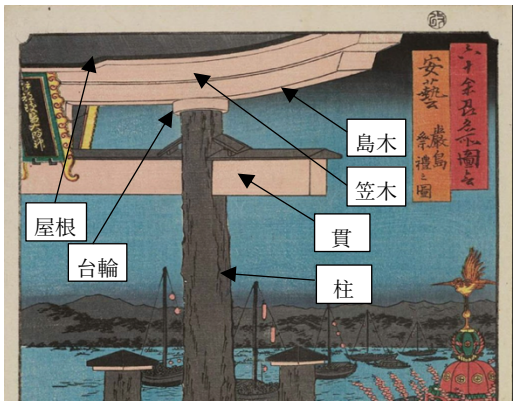


内砥川八幡神社境内放置鳥居笠木島

1875 年建立の現在の厳島神社両部鳥居

居と異なるのは二本の柱が倒れない様四本の足(稚児柱)が側されている事と、笠木の上に瓦屋根が被っている事である。厳島神社の大鳥居は、以前は明神鳥居であったが天文十六年(1546)からこの種の両部鳥居に変更されたとなっている(Wikipedia 参照)。「笠木」とは建築用語では下部への雨水等の侵入を防ぐためのカバー

佐賀多久神社両部鳥居



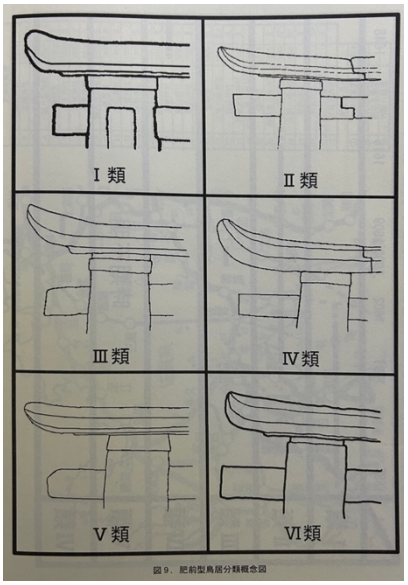
「六十余州名所図会安芸厳島祭礼之図」より一部

で、現代では古い家の外壁の上に瓦屋根が施されているものも見受けられるが、その瓦屋根も「笠木」と呼ばれる。嘉永六年(1854)歌川広重刊行の「六十余州名所図会安芸厳島祭礼之図」には両部鳥居になった直後の厳島神社の鳥居の絵が掲載されており、檜皮葺か柿葺か板葺等の屋根が笠木の上に載っている。因みに、檜皮葺は檜の樹皮を重ねて屋根として施工する工法、柿葺は木の薄板を重ねて屋根として施工する工法である。この工法は日本古来の工法であり、瓦葺き屋根が発達しても存在し続けた。現代では、一部の古神社仏閣で未だ存在する。佐賀多久市の多久神社の木製両部鳥居でも板葺屋根の上に銅葺がなされている。因みに明神鳥居の笠木の上に屋根が搭載されている鳥居もある。

佐賀市中心の佐賀神社横に松原神社があるが、元は「日峯社」といい安永元年(1772)に藩祖勝茂を祭神とした神社である。ここに一之鳥居として両部鳥居があった。この両部鳥居が、肥前鳥居の様に島木が薄く、存在しない様に見える。この鳥居は内砥川八幡神社の三之鳥居に非常に良く似ている。佐賀型肥前鳥居に関わる数少ない研

佐賀松原神社(日峯社)一之鳥居

究報告書の内、2018年福岡大学七隈史学会刊行の「七隈史学」の中で、「肥前型鳥居の考古学的研究」と題して西田尚史氏が肥前鳥居の形状に関する分類を記している。佐賀型肥前鳥居は6種類に分類でき、先の内砥川八幡神社三之鳥居は右表Ⅰ類と考えられる。そこにはⅣ類以外は薄い島木が存在し、それらを一覧とした下表では「島木（しまき）」と表現されている。また、「偽島木（にせしまき）」はその薄い島木と笠木の間にある島木様に見える物の事である。その表を見ると、1602年前には薄い島木と笠木による形であったが、次第に笠木が二段に分かれて偽島木が発生し、その後、薄い本来の島木が無くなって行っている。薄い島木が存在しなくなるのは、27番の五ノ宮神社以降で、建立は1648年となっている。佐賀型肥前鳥居の特徴として「笠木と島木の鼻切が一体化している。」と表現したのは、この薄い島木が無くなって以降の形を捉えたものと考える。



「七隈史学」
肥前鳥居の考古学的研究より

番号	神社名	島木の表現			台輪の形状・位置		額が正方形に円文	分類	年代	寄進者
		島木のみ	島木＋偽島木	偽島木のみ	最頂部	上部に接さない				
1	稲佐神社	○			○		欠損	Ⅰ	1585	不明
2	室園神社	○			○		○	Ⅰa	1590	鶴田上総介賢
3	牛尾神社		○			○		Ⅱ	1597	鍋島勝茂
4	湊八坂神社	○			○		○	Ⅰa	1597	不明
5	櫛田宮	○			○			Ⅰ	1602	鍋島勝茂
6	本庄神社(二)		○			○		Ⅱ	1603	鍋島直茂
7	与賀神社(三)		○			○		Ⅱ	1603	鍋島直茂妻
8	与賀神社(二)		○			○		Ⅱ	1604	成富長安
9	龍造寺八幡宮		○			○		Ⅱ	1604	鍋島直茂妻
10	佐渡宮		○			○		Ⅱ	1606	(鍋島生三)
11	本庄神社(一)		○			○		Ⅱ	1606	鍋島房重妻
12	香椎神社					○			1606	龍造寺政家
13	伊勢神社		○			○		Ⅱ	1607	北島津雲斎他
14	北村天満宮		○			○		Ⅱ	1607	不明
15	北野天満宮		○			○		Ⅱ	1607	不明
16	淀姫神社		○			○		Ⅱ	1608	鍋島勝茂
17	妻山神社	○				○		Ⅲ	1608	龍造寺信明
18	新北神社		○			○		Ⅱ	1608	鍋島直茂
19	千栗八幡宮					○		Ⅱ	1609	鍋島直茂
20	筥崎宮		○					Ⅵ	1609	黒田長政
21	江見八幡宮		○			○	○	Ⅱa	1611	大河五〇左衛門
22	堤雄神社		○			○		Ⅱ	1611	不明
23	岩蔵天山神社		○			○		Ⅱ	1612	鍋島直茂・勝茂他
24	生立ヶ里八幡神社					○			1612	持永茂益
25	鏡神社					○			1615	不明
26	西蒲池三島神社		○			○		Ⅱ	1615	田中忠政
27	五ノ宮神社			○	○			Ⅳ	1648	不明
28	久間八幡神社			○	○			Ⅳ	1666	不明
29	琴路神社		○			○		Ⅱ		不明
30	須賀神社		○		○		○	Ⅴa		不明
31	内砥川八幡宮	○			○			Ⅰ		不明

図8．肥前型鳥居分類一覧表

①
②
③

「七隈史学」肥前鳥居の考古学的研究より

① 笠木、薄い島木

② 笠木、偽島木＋薄い島木

③ 笠木、偽島木　＝　「笠木と島木が一体化」

六、肥前鳥居纏め

笠木島木が一体化するというのは良くあることかも知れない。先日ヤフオクで見つけた本が「高畠町の鳥居」というもので、山形県高畠町に存在するすべての鳥居について詳細の調査を実施し、冊子に纏められている。その表紙に掲載されていた愛宕神社の鳥居は、正面から見ると笠木と島木が一体となっている。頁をめくると一体となっている鳥居は他にもあり、特別なものではないことがわかる。ただし、鳥居を側面から見ると、壱岐型肥前鳥居に似ている。先に挙げていた壱岐型肥前鳥居を肥前鳥居の範囲内に導入すると、右高畠町の鳥居も壱岐型肥前鳥居の一つとなる。個人的見解としては、この壱岐型肥前鳥居は「肥前」の範囲には無い鳥居であり、笠木島木の形態が飽く迄も明神鳥居の改良型であるため、この事からも「肥前鳥居」を冠することは出来ない。又、先に述べた明神鳥居折衷型は笠木島木の形は明神鳥居であり、これももちろん「肥前鳥居」では無い。最終的に「肥前鳥居」とは特徴が笠木島木にあり、元は笠木島木があったが時代が経る毎に島木が偽島木（にせしまき）に取って代わられていった佐賀型肥前鳥居の事である。また、肥前鳥居の笠木は明神鳥居の笠木の上に檜皮葺か柿葺等の屋根が存在した形であった。その形を石工が忠実に再現したものであり、近世は文化芸術が発展していく時代であるが、意匠が改良されて発展し、それと共にこの屋根も簡略化され省略されて行ったのである。

七、最後に

今回の論考として肥前鳥居の分類における笠木島木の形状に付いて述べたが、1600年前後の肥前鳥居には柱間と貫迄の高さの比に明神鳥居とは異なる木割の特徴が見られる。中世明神鳥居の木割との比較も肥前鳥居の成り立ちとして必要である。

又、鳥居の各部分名称は寺院・神殿建築用語を使用している。中世、近世文書に既にそれらの名前が使用されており、鳥居の成り立ちもその建築に関係する可能性がある。本来ならば、建築歴史を勉強したい所であるが、現在のところ情報が各種本でしかないため時間がかかるが、自分なりの肥前鳥居と石工、建築を結びつけて研究していく。

【参考文献】

昭和十八年(1943)　根岸榮隆著　「鳥居の研究」
昭和十八年(1943)　津村勇著　「鳥居考」
平成二十六年(2014)　谷田博幸著　「鳥居」

平成三十年(2018) 七隈史学論文　西田尚史著
「肥前型鳥居の考古学的研究」
平成二十七年(2015) 東北芸術工科大学
文化財保存修復研究センター
「高畠町の鳥居」
令和元年(2019) 佐藤亜聖編　「中世石工の考古学」
平成十二年(2000) 真弓常忠著　「祇園信仰」
令和二年(2020)　松崎照明著　「山に立つ神と仏」